

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷十二第

行發日一月一年四十四正大

號別特

地租と營業税との對立に關する考察……………法學博士 神戸 正雄

西陣の機業仲間……………經濟學博士 本庄榮治郎

朝鮮の農業金融組織……………法學博士 河田 嗣郎

往古に於ける上海と日本の史的關係……………文學博士 新村 出

資本の社會的性質……………法學博士 河上 肇

ビオ・ソシヤル假説の意義……………文學博士 米田庄太郎

産業集中に就てのマルクス説の謬想……………法學博士 田島 錦治

金紙幣本位制……………法學士 作田 莊一

水産資本融通問題……………法學博士 山本美越乃

海運に於ける競争の運賃に及ぼす影響……………法學士 小島昌太郎

支那の帝政と支那の文化……………文學博士 矢野 仁一

倫理と經濟との關係……………法學博士 財部 靜治

資本の社會的性質

河 上 肇

要

- 一、資本を技術的に觀念する通説
- 二、價值が社會的に獨立の現象形態を有つことは資本成立の要件である
- 三、貨幣の資本化ならびに之に伴ふ商品の資本化
- 四、生産界における資本の發生
- 五、資本を資本たらしむるものは社會關係である

目

資本を技術的に觀念する通説

資本とは何ぞや。これに關する諸家の意見をば、私が茲に必要とする標準によつて分てば、これを以て絶對的範疇に屬すとすものと、歴史的範疇に屬すとすものとの、二種に大別することが出来る。

これを絶對的範疇に屬すとす者は、その例枚舉に違がない。今その一例として、山崎博士の説明——大正六年にその初版を發行されたる『經濟原論』より取る——を擧げるならば、次の如く

1) 32, 68頁參照。——博士が今日も尙ほ斯かる説を維持して居らるゝや否やを知らぬが、日本語の原論では比較的に最も新しい著作に屬するから、姑く之を茲に引用する。

である。

『……如何なる種類の生産と雖も、人の勞働之を指導するに非ざれば行ふを得ず、又自然の助を藉りて初めて之を行ふを得るなり、然れども此二者のみを以てするときは、生産は毫も進歩發達するを得ず、更に資本なるものを要するものにして、尙ほ野蠻草昧の境遇を脱せざる民族と雖も、多少の器具——即ち資本——を有するを見るなり。是を以て自然、勞働、及び資本は、生産の三要素と稱せらる。』

又曰く

『生産は自然と勞働とのみを以て之を爲し得る場合なきに非ず。例へば野生の菓實を集め、海濱に魚介を拾ふが如き是なり。然れども極めて簡單なる生産と雖も、多くは資本の協力を要するものにして、即ち或種類の生産は資本を缺ぐときは之を行ふこと能はず、或種類の生産は資本を用ゐるときは其目的を達すること易く、又或種類の生産は資本の力に依り生産物の數量を大にし、又は品質を善良にするものとす。極めて簡單なる生産に於て然り。進歩せる生産に於て資本の必要なるは言ふを俟たざるなり。』

以上の場合に資本と稱せられつゝあるものは、たゞ人間の生産した生産手段といふほどのものであるから、さてこそ、『野蠻草昧の境遇を脱せざる民族と雖も、多少の器具を有するを見る』

2) 引用者の補ひたる言葉。

ことにおいて、『自然、労働、及び資本は、生産の三要素と稱せらる』ることになるのであり、また『進歩せる生産に於て、資本の必要なるは、言ふを俟たざる』こともなるのである。

資本および利子の研究のため其の學問的努力の大半を捧げたと謂つても不可なかるべき、かのボエーム・パウエルクの如きも、資本を觀念すること亦た之と同じである。彼は生産を分つて、直接生産と迂回生産との二種となした。例へば、吾々が飲料水を得んとする時に、泉なり川なりに赴いて、何等の器具をも用ひず、手を以て水を掬し直ちに之を飲むが如き場合は、これを直接の生産となし、之に反し、先づ井戸を掘り樋を掛けなどして然る後始めてその必要とする水を得るが如き場合は、これを迂回の生産といふ。かくて迂回の生産にあつては、最後の目的物たる水の外に、井戸、樋などいふ中間生産物(Zwischenprodukte)が存在するが、今ボエーム・パウエルクは、是等の中間生産物を總稱して資本と謂ひ、また迂回の生産を名づけて kapitalistische Produktion (資本的生産)と謂ふ、といふのである。³⁾ところで、例へば吾々が飲料水を得んとする時に、泉なり川なりに赴いて、何等の器具をも用ふることなく、手を以て水を掬し直ちに之を飲むといふが如く、物の生産に當り過去の生産物をば絶対に用ひないといふことは、人間の生産的活動において殆ど稀有の事例であるから、もし吾々が、資本なり資本的生産なりを、ボエーム・パウエルクと言ふが如くに觀念するならば、畢竟するに、資本は殆ど總ての生産に用ひられ、従つて殆ど總て

3) Böhm-Bawerk, Positive Theorie des Kapitals, I Buch, 2 Abschnitt. (3te Aufl., SS. 15—21.)

の生産は資本的生産である、といふことになる。

資本を以上の如くに觀念する以上、それは人類の經濟にとつて絶對的範疇に屬するものとなる。蓋し人間の歴史を如何に古く遡ることも、そこに斯かる意味における資本のない時代といふものはなく、また人間の歴史が將來どれほどの年數を経ても、斯かる意味における資本の無くなる時代が到來する筈はない。それと同時に、謂ゆる *Kapitalistische Produktion* なるものも、遠く太古から存在し、また永遠に存在すべき筈である。だから、その意味における資本を無くせんとし、またはその意味における資本的生産を無くせんとする企なり主張なりは、まことに荒唐無稽の甚しきものとなる。しかしながら、資本なり資本的生産なりを此の如くに觀念することは、謂ゆる經濟學者に限られる。少くとも、世間大多數の人々が、是等の學者とは違つた内容において、資本または資本的生産を觀念してゐると云ふことは、疑を容れる餘地がない。例へば、資本を放下すとか資本を回收すとかいふ類の言葉は、廣く用ひられてゐるが、其等の場合に謂ふところの資本をば、上に引用した學者等のいふ意味に解釋するならば、それを放下すとか回收すとかいふことは、恐らく意味を成さなくなるであらう。次に *Kapitalistische Produktion* なる語の我國における譯語はまだ一定してゐないけれども、今日普通には、之に相當する用語として資本制生産、資本家的生産、資本主義的生産なる言葉を用ひてゐる。それゆへ、ボエーム・パウエ

ルクのいふ kapitalistische Produktion に置き換へるに假に是等の言葉を以てするならば、例へば一人の乞食が湯を得んがため火を以て水を温めつゝある場合にも、そこに資本制生産、資本家的生産、資本主義的生産が行はれてゐる、と謂はなければならぬが、それは聊か滑稽であらう。今日、kapitalistische Produktion に代るる socialistische Produktion を以てしなければならぬなど言はるゝ場合に、その指すところの kapitalistische Produktion が、斯様なものでないことは、言ふまでもあるまい。これによつて觀れば、以上引用した諸學者の觀念するが如き、人類經濟の絶對的範疇に屬するものとしての資本の外に、それとは全く性質を異にするところの、一の歴史的範疇に屬するものとしての資本なるものが、多くの人々によつて觀念されつゝあることは、明かな事實である。乃ち之を一つの絶對的範疇に祭り込むことの是非は別として、その外に、一つの歴史的範疇に屬するものとしての資本なるものが存在するといふことは、何人にとつても異存あるまい。現にボエーム・パウエルクでも、上に引用したやうな資本の外に、營利資本なるものゝ存在することを認めてゐる。今私のこの論文は、絶對的、自然的範疇に屬するものとしての資本とは何ぞやといふことを、問題とするのではなくて、歴史的、社會的範疇に屬するものとしての資本の性質を明かにせんことを、其の主眼とする。

價值が社會的に獨立の現象形態を有つことは

資本成立の要件である

私が茲に問題とする資本は、一定の歴史的、社會的諸條件の下にのみ存在する。さうして其等の諸條件は、これを詮じつめるならば、或る特種なる商品の發生といふことに歸着するやうである。私が茲に或る特種なる商品といふのは、第一には、流通界にのみ用ひらるゝための特種なる商品としての貨幣と、第二には、生産界において消費さるべき特種なる商品としての勞働力を意味する。なほ私の見るところによれば、資本は第一に貨幣の發生を俟つて先づ流通界に現はれ、更に商品としての勞働力の發生を俟つて始めて、實に流通界にのみならず、生産界にも現はれ得るに至つたものである。私は先づ流通界における資本の發生について述ぶるであらう。

流通界において資本が發生するためには、實に商品の交換が行はれてゐるのみならず、それが後に述ぶるであらう如き程度の發展を遂げ、その結果、價值なるものが社會的に獨立の現象形態を有し得るに至ることが、その欠ぐべからざる條件とされる。

蓋し商品の交換が行はれるといふことは、價值が獨立の現象形態を有つための發端である。何故といふに、如何なる程度のものであつても、ともかく一たび商品の交換が行はれることになれ

ば、一商品に含まるゝ二重の性質、即ちその使用價值と價值とが、始めて現象的に分裂するからである。例へば、米一斗が織物一反と交換されるならば、米一斗の價值が織物一反に等しいとされるのであり、従つて米一斗の價值が織物一反といふ使用價值の體によつて表現されるのであり、従つてまた、米一斗のうちに含まれてゐる價值が、米そのものゝ使用價值から離れて、獨立の存在を保つことになるのである。けれども、此の如き商品の交換が、たゞ偶然的、一時的のみに行はるゝ限り、或る商品の價值がその使用價值から離れて獨立の現象形態を有すといふことも、やはり偶然的、一時的の出來事たるに止まり、それは社會的の現象となり得ない。價值が社會的に獨立の現象形態を有するがためには、商品の交換が或る程度以上の社會的重要さを有して來なければならぬ。

商品の交換が或る程度以上頻繁に行はれて來れば、其等商品の交換を媒介するために、交換の媒介者としての貨幣なるものが發生する。

商品なる語を廣義に用ふれば、貨幣も亦た一種の商品に外ならぬが、しかしそれは極めて特種の商品である。何故といふに、それは他物と交換せんがためにのみ所有せらるゝことを、社會的に條件づけられてゐるからである。勿論あらゆる商品は、他物と交換せんがために生産される。けれども、其等の商品は、結局何人かによつて消費さるべく運命づけられてゐるので、たとひ一

且は流通界に流れ出ても、何時かは必ず生産界に舞ひ戻り、(謂ゆる生産財たる性質を有する物がさうである)、または消費界に這入り、(謂ゆる享樂財たる性質を有する物がさうである)、そこで何等かの目的のために消費されて仕まふ。だから其等の物は、全く社會關係を離れても、尙ほ一定の使用價值を有し得るものである。即ちロビンソン・クルソーの生活においても、生産財と享樂財は、依然、財として残る。このことは、是等の生産財なり享樂財なりが、商品として生産さるゝことにより、たとひ一定の社會的性質を有し得るにしても、それは直接にか間接にか、結局或る個人的欲望の満足を目的とするといふ點において、對個人的性質——個人的の使用價值——を保留しつつある證據である。だから、個人的生産の下においても社會的生産の下においても、また如何なる形態の社會的生産の下においても、一つの自然的、絶對的範疇に屬するものとして、生産財および享樂財の區別は残る。けれども、貨幣になると、それは全く社會的、歴史的の範疇に屬するものである。だから、ロビンソン・クルソーにとつては、貨幣は貨幣となり得ない。一切の交換關係——社會關係——から孤立せる者にとつて、交換の媒介者としての貨幣が、何等の用をも爲さざるは、言ふまでもない。嘗にロビンソン・クルソーに限らず、凡そ商品の交換が社會的に行はれざる社會——それは過去に存し、將來にも復た存し得る——においては、交換の媒介者としての貨幣が、何等かの用をなし得る筈がない。このことは、貨幣なるものが純

粹な社會的の——従つて歴史的の——産物であることを意味する。それは、商品生産の社會自體が——社會的富の生産が商品の生産として行はれるといふ社會的生産の歴史的形態そのものが——要求するところのものであり、従つて社會的の使用價值をのみ有し、個人的消費の目的のために起る使用價值の一分子をも含まざるものである。

既に述べたやうに、一たび商品の交換が行はるれば、一商品の價值は、それ自身の使用價值から離れて、交換の相手方たる他の商品の使用價值の上に表現せらるゝことにより、價值と使用價值との分離が行はれる。けれども一商品の價值を表現するところの、交換の相手方たる他の商品は、依然として使用價值を有する商品であるから、この場合、價值と使用價值との分離は、決して徹底的に實現されるわけではない。けれども既に貨幣が発生し、さうして、個人的消費の目的のために起る使用價值の一分子をも含まざる此の貨幣なるものが、その交換の相手方となる一切の商品の價值を表現することになれば、商品の價值と使用價值との分離は、茲に始めて徹底的に實現される。つまり、價值の純粹なる凝結物であるといふことにおいて社會的使用價值を有つところの、——簡單に言へば、價值たることを其の使用價值とするところの、——貨幣なるもの、發生によつて、價值は始めて把握し得べき、眼にて視ることを得べき物體の上に、その獨立の社會的存在を有し得るに至るのである。

ところで、既に價值なるものが、此の如く社會的に獨立の現象形態を有することになれば、始めて、その社會に棲める或る人々の意識の上に、價值そのものを増殖せんとするの意圖が起る。之を譬へて言はば、水には酸素と水素とが含まれてゐるとしても、もし其の酸素なり水素なりが互に分離して獨立の存在を保ち得ない限り、酸素なり水素なりを獲得し又は増殖しやうといふ考が、人間に起り得る筈はない。それと同じ道理によつて、使用價值と價值とが徹底的に分離されることにより、價值が社會的に獨立の現象形態を有し得るやうな、一定の歴史的、社會的條件の具はつた社會にでなければ、價值そのものを増殖しやうといふ意識——營利の精神、即ち資本の精神——の起り得る筈はないが、しかし一旦さういふ條件の具はつた社會が生るれば、自然的に、必然的に、使用價值を目的としない經濟活動が喚び起される。元來人間の經濟活動は、生活上の欲望を満さんがための物資——即ち使用價值を有する富——を得んがために行はれるのだから、使用價值の獲得を目的としない、たゞ價值そのもの、増殖を目的とするやうな經濟活動が生ずるといふことは、一應不可思議のやうであるけれども、以上述べたやうな歴史的、社會的條件の下では、却てそれが自然的、必然的の現象となるのであり、且つ正にそのために、私が茲に問題としてゐる資本なるものが、始めて發生することになるのである。

貨幣の資本化ならびに之に伴ふ商品の資本化

資本とは一定の社會關係を通じてそれ自身を増大せんとする價値の謂ひである。さうして、交換の媒介者たる貨幣は、それ自身の價値を増大せんがため利用せらるゝことにより、單なる貨幣から轉じて資本としての貨幣となる。

單なる交換の媒介者としての貨幣の流通は、既にマルクスが詳しく論じてゐるやうに、 W (商品) — G (金) — W' (他の商品) なる形式を取る。詳しく言へば、或る商品 (W) の所有者 A が、貨幣 (G) の所有者 B と、互にその所有物の交換をなし、然る後 A は、その得たる貨幣をば、 C なる第三者の所有せる他種の商品 (W') と交換し、かくて最初 W なる商品を所有せし A の手に、それと置き換へて、 W' なる商品が残されることになるのである。だから之を A の立場から言へば、全取引の意義は、最初彼れの所有せしが W が W' と置き換へられたといふ點に存するのであり、從つても、 A が W をば W' と交換せんことを希望しつゝあると同時に、 C も亦た恰も W' をば W と交換せんことを希望しつゝあるとするならば、この場合貨幣の必要は少しも存在しないのである。即ちこの場合の貨幣の機能は、貨幣なくしても猶ほ行はれ得る商品相互の交換をば、彼れ自ら其等交換の媒介者となることにおいて、より容易に、より便宜に實現するといふ點に存する。

しかるに、貨幣が資本化する時は、これによつて同じやうに商品の賣買が行はれるとしても、その流通の形式は、變じて $G(\text{貨幣}) \rightarrow W(\text{商品}) \rightarrow G(\text{より多への貨幣})$ となる。詳しく言へば、貨幣 (G) の所有者 A は、之を以て商品 (W) を買ひ、然る後その商品をばより高く賣ることによつて、最初よりもより多くの貨幣を入手するのである。この場合には、全取引の結果として、最初貨幣を所有せし A の手に依然として同じ貨幣が残存することになるのであるから、最初の貨幣がその分量を増して復歸するのでなければ、——言ひ換ふれば、G は $G' + g$ となつて回收されるのでなければ、——全體の取引は、A のために無意味となる。このことは、かゝる取引が、價値の増殖をその生命となすことを意味する。しかも一定の社會關係により其れ自身の價値を増大する機能を有するものは、即ち資本である。それゆへ、 $G \rightarrow W \rightarrow G$ なる形式は、畢竟、資本轉形の一形式に外ならぬ。この場合、貨幣 G は A のため價値増殖の機能を有つことによつて資本化するのであり、従つてまた商品 W も、貨幣 G が A のため其れ自身の價値を増大する方便として、暫くその價値を商品の形態に轉じてゐるに過ぎぬのであるから、貨幣 G が A のために資本化すると共に、——資本化するが故に、——商品 W も亦た A のために資本化するのである。

斯様にして、常に貨幣が資本化するのみならず、種々の商品も亦た資本化することが出来る。

しかし若し貨幣が存在せず、従つて其等の商品はたゞ相互に交換されるだけで、例へばAの所有せる米一斗がBの所有せる織物一反と交換されるといふに止まるならば、たとひ之によつて、實にAの所有せる使用價值がその質を變ずるのみならず、その價值の量をも増加するとしても、貨幣なき限り、その價值量の増加を圖るべき標準がない。(勿論、Aの所有せる米一斗が、Bの所有せる米二斗と交換されるといふやうに、同じ使用價值のより多くの分量と交換されるならば、彼は斯かる交換によつて實現され得る價值の増殖を測定し得るであらうけれども、しかし此の如き同じ品質の使用價值の間において交換の起り得べき筈は無論ない。)交換によつて實現され得る價值量の増加の正確なる測定は、純粹なる價值の凝結物たる——従つて價值の尺度となり得る——貨幣の存在を必須の條件とする。だから、既に述べたやうに、種々なる商品も亦た、貨幣が資本化すると共に資本化し得るのであるが、しかし其等の商品は、如何なる場合においても、貨幣との連絡を離れて資本化することは出来ない。資本の價值はたとひ如何に種々なる形態の財に宿り得るとしても、それは絶えず貨幣形態に復歸することにより、その價值量の増加を測定するの必要に迫られる。即ち資本は絶えず其の姿をば貨幣といふ純粹な價值の鏡に映して自身の増大を確めつゝ進まなければならぬのである。是れ資本なるものが、貨幣の存在する社會においてのみ始めて存在し得る所以である。

既に貨幣が発生すれば、資本は先づ二様の種類において發生する。一は利貸資本として、二は商業資本として、ある。利貸資本の流通は $G(\text{貨幣}) \rightarrow G(\text{貨幣})$ の形式を取る。この $G(\text{貨幣})$ が G' (より多くの貨幣) となることは資本の本質的要求であり、さうして利貸資本は此の要求をば最も露骨に且つ最も簡單に實現しつゝある種類の資本であるが、しかし資本は自ら資本として活きんがために、より複雑な、より迂回の過程を経ることを厭はない。即ちそれは利貸資本として現はれる外に、また商業資本として現はれる。商業資本の流通は $G(\text{貨幣}) \rightarrow W(\text{商品}) \rightarrow G(\text{貨幣})$ の形式を取る。この場合には、 $G(\text{貨幣})$ が G' (より多くの貨幣) たらんがために、一應 $W(\text{商品})$ に轉形するといふ點において、利貸資本の場合に比ぶれば、少しく複雑な行程を経る。けれども此の場合、資本はたゞ商品の賣買に與かるだけで、商品の生産そのものには手を觸れない。即ち吾々の生活の基本たる富の生産は、全く資本の勢力範圍の外に保留され、従つて、資本が吾々の社會的生活の上に支配的勢力を揮ふところの、資本主義の社會なるものは、まだ生まれぬ。

生産界における資本の發生

しかし資本は決して何時までも流通界に局踏することに甘んじない。勿論資本は資本として生きたがために成るべく手数の掛からない道を好むけれども、ただ其等の方面における活動の範囲には自ら限りあるが故に、それは次第により複雑な、より迂回の行程を経ることを餘儀なくされるのであり、かくて資本は遂に生産界に侵入して自ら商品の生産を営むことにより、新たに生産資本または産業資本となつて、次の如き循環行程を採ることになる。

$$G(\text{貨幣}) \rightarrow W(\text{商品}) \xrightarrow{P_m(\text{生産手段})} P(\text{生産資本}) \rightarrow W'(\text{新たな商品}) \rightarrow G'(\text{より多くの貨幣})$$

A(労働力)

即ち資本は先づ生産に必要な諸商品(W)を買い入れ、自ら生産資本(P)となることにより一定の生産を営み、かくて其の買入れたる諸商品を生産的に消費する代りに、新たな商品(W')を生産し、これを賣ることによつて、その目的とするところの價値の増殖を實現するに至るのである。この場合、或る商品を買入るといふ始點の行程と、或る商品を賣るといふ終點の行程とは、共に流通界における活動に屬し、それは前に述べた商業資本の循環行程における始點と終點と、全く性質を同じうする。けれども、その賣るところの商品は、産業資本の場合にあつては、買入れたままの商品でなくて、買入れた諸商品の生産的消費によつて新たに生産された商品である。このことは、資本がそれと獨立せる生産方法の下に生産さるゝ商品の賣買を司ることに満足することが

最早や出來なくなつて、資本自らが其の支配の下に商品の生産——即ち資本的生産——を營むに至つたことを意味する。しかるに、總ての生産には、物的要素としての生産手段の外に、人的要素としての人間の労働を必要とする。だから資本が自ら生産を營まんがために買入るゝ商品のなかに、物的生産手段の外に、必ず人間の労働力が含まれてゐなければならぬ。さうして此のことは、労働力といふ特種なる商品の存在が、産業資本成立のための缺ぐべからざる條件であることを意味する。かゝる特種の商品が物的生産手段たるべき諸商品と共に買入れらるゝが故に、貨幣形態を有つた資本(即ち貨幣資本)が始めて生産資本(P)となり得るのである。生産資本は使用價值を生産すると共に價值を生産することを、その使命とする。否な、價值を生産するが故に、それは生産資本となり得るので、それが使用價值を生産するのは、そのことが價值を生産するための條件だからである。しかるに、この生産資本によつて新たなる價值が生まれ、従つて資本自體の價值が増殖されるのは、労働力が生産行程において消費されることにより、それ自身の價值よりも、多くの價值に生れ代るがためである。

既に述べたやうに、利貸資本の場合には、資本は貨幣以外の形態を有ち得ないのであり、それは何時でも貨幣資本としてのみ現はれる。また商業資本の場合にあつては、資本は初め貨幣形態を以て現はれ、次いで商品形態に轉するのであるから、それは貨幣資本として現はれ、また商品

資本として現はれるのであるが、しかし其れ以外の形態に轉することは出来ない。しかるに産業資本は第一段に貨幣資本として現はれ、次いで生産に必要な諸商品を買ふことにより第二段には生産資本となり、更に新たに生産された商品に轉形することにより第三段には商品資本となる。かくて生産資本たる形態を有し得るのは、獨り産業資本のみであるが、それは既に述べたやうに、産業資本のみが勞働力といふ特種の商品を買入れ得るからである。商業資本は有らゆる種類の商品を買入れ得たけれども、たゞ勞働力といふ商品のみは之を買入れることが出来なかつたのであり、従つて自ら生産を營むための形態に轉することが出来なかつたのである。だから、生産資本としての資本は、全く商品としての勞働力の賣手たる賃勞働者の存在に依存する、といふことが出来る。

私は先きに、資本は一定の歴史的、社會的條件の下にのみ存在し得るものなること、および其の條件なるものは、畢竟するに、或る特種なる商品の發生に歸着することを斷言し、先づ第一に、總じて資本、具體的に言へば其の太初的種類に屬する利貸資本および商業資本は、商品の交換が或る程度以上の發展を遂げ、其等商品の交換を媒介する特種なる商品としての貨幣——純粹なる價值たることを其の使用價值とする貨幣——なるものが發生するに至つて、始めて流通界に

現はれ得るものなることを、明かにしたが、私は更にそれに引續き述べ來つたところにより、資本の近代的種類に屬する産業資本は、勞働力といふ特種の商品——それ自身の價值よりも、多くの價值を生むことを其の使用價值とする點において、それはまことに特種の商品である——の存在を俟つて始めて生産界に現はれ得るものなることを、明かにし得たと考へる。是によつて觀れば、産業資本は、従つて生産資本は、人間の勞働力までが商品化する程度にまで、商品の交換が發展して來たといふ條件——それは極めて長い年代に亘る歴史的過程が産んだ特種の社會的條件である——の下にのみ、始めて發生し得るものである。言ふまでもなく、人間の勞働力は人間と共に太初から存在する。しかのみならず、その勞働力が商品として賣買され、従つて賃勞働者といふ特種なる階級の人間が發生すること其れ自身は、必ずしも商品の生産が高度の發展を遂げた近代に限つたわけではない。例へば、謂ゆる牧畜種族の間にあつて、家畜なる生産手段が社會一部の階級の獨占的所有に屬せし場合には、奴隸とは明かに其の性質を異にするところの、一種の自由勞働者としての賃勞働者が、發生したものである。けれども、使用價值の生産を目的とする斯かる社會には、たとひ賃勞働者が現はれても、産業資本——または生産資本——は發生し得ない。かゝる種類の資本が發生するのは、勞働力が、價值の増殖を目的とする商品生産のために、利用さるゝに至つてからのことである。だから、たゞ單に、産業資本(生産資本)は勞働力が

商品となると共に(従つて賃労働者が發生すると共に)發生すると言つたのでは、不正確である。嚴密に言へば、それは勞働力が商品として資本により買取らるゝことにより始めて發生するのである。

資本を資本たらしむるものは社會關係である

私は以上を以て、歴史的、社會的範疇に屬するものとしての、資本の概念を、略ぼ明かにしたつもりである。さうして、既に資本を斯かる意味に解するならば、何が資本であるか否かを決定するものは、全くその物を通して結ばれる社會關係の如何であり、物そのもの、自然的性質は、少しもそれに關係せざることが、明かである。私はそのことにつき更に敷衍を費して此の篇を終るであらう。

第一に貨幣は、既に述べたやうに、如何なる種類の資本とも離るべからざる關係を有するものであり、従つて貨幣の存在しないところには如何なる種類の資本も存在し得ないのであるが、しかし總ての貨幣が總ての場合に資本となるのではない。元來貨幣はそれ自身が一つの社會的產物であり、一定の社會關係の下においてのみ貨幣は貨幣となり得るのであるが、一かし其のものがたゞ單に商品の交換を媒介してゐるに止まる限り、それは單なる貨幣であつて資本ではない。一

定の社會關係の下においてのみ始めて貨幣となり得たる貨幣は、更に他の一定の社會關係の下においてのみ始めて資本となり得るのである。例へば一定の貨幣がAなる人の立場から見て $G-W$ なる社會關係の連鎖のうちにも働くならば、それは其の人のために單なる貨幣であつて資本ではない。しかし此の場合の $W-G$ (商品を賣りて貨幣に換へること) は、交換の相手方たるBの立場から見れば $G-W$ (貨幣を支出して商品を買ふこと) であり、さうして其の $G-W$ がもし其の人の立場から見て $G-W-G$ といふ社會關係の一關節を成しつゝあるならば、(即ち其の人は高く賣らんがために之を買ふのであるならば)、同じ時にA B兩者の間に受授される同じ貨幣が、Aのためには資本とならざるに拘らず、Bのためには資本となる。

第二に、種々なる商品も亦た一定の社會關係の下において資本となる。 $G-W-G$ なる商業資本の循環行程に介在する商品Wも、 $G-W \xrightarrow{P_m} A \dots P \dots W' - G$ なる産業資本の循環行程に介在する商品Wも、皆な資本が一時その形を轉じたものに過ぎぬのであるから、それは商品でありまた資本である。ところで、其等の商品が賣られるためには之を買ふ人がなければならぬのであるが、しかし若しその買手が之を個人的消費の目的に充當するのであるならば、しかせらるることによつて、そのものは社會的富たる性質を失ひ、従つて資本とはなり得ない。例へば、その賣買された商品が穀物、鍋、燃料等、家庭用の食物を調理するための材料なり器具なりである

とする。然る時、吾々がもしポエーム・パウエルクに倣ひ、總ての社會關係を無視して只だ技術學的に、一切の中間生産物を資本であると觀念し、また之を用ひて行ふ生産をば總て資本的生產であると觀念するならば、其等の商品は、個人的消費の目的のために買取られた後においても、依然として資本であり、また或る個人の家庭内において其等の材料なり器具なりを用ひて行ふ食物の調理も、一の Kapitalistische-Produktion である、といふことになるのであるが、私は資本をば一の歴史的、社會的内容を有てるものとして觀念するが故に、かゝる場合には、たゞそこに或る種類の生産手段があり、それによつて或る種類の個人的生産が行はれるに過ぎぬとするのである。

第三に、種々なる生産手段は、産業資本が生産行程において採れる形態たる生産資本の、主要なる構成分子である。けれども、既に前項において一言したやうに、總ての生産手段が總ての場合に盡く資本となるのではない。一定の生産手段が資本たる資格を有ち得るのは、それが産業資本の生産行程に這入り込み、資本家的商品の生産に役立つからである。即ち生産手段は生産手段たるが故に資本となるのではない。生産手段が資本であるがために、之によつて行はるゝ生産が資本的生產であるのではなく、寧ろ一定の生産が資本的生產であるがために、それに使用せらるゝ生産手段が資本となるのである。

第四に、勞働力も亦た資本となる。既に述べたやうに、産業資本は生産行程において生産資本の姿を採るが、その生産資本の物的要素を構成するものは生産手段であり、その人的要素を構成するものは即ち勞働力である。固より勞働力はそれ自身において資本たるのではない。現にその賣手たる賃勞働者にとつては、それは只だ單なる商品に過ぎない。それは他の物的生産手段と同じやうに、産業資本家により買取られ、資本家的商品の生産に役立つことにより、當該資本家のために、始めて資本となるのである。

(附言)私は嘗て本誌に「資本の概念」¹⁾と題する論文を掲げ、また引續き之に關聯する二篇の論文²⁾を掲げた。今におよんで之を回顧するに、當時私の觀念したところの資本は、略ぼ茲にいふ貨幣資本に該當するものである。従つて件の論文は、資本の一形態に過ぎざる貨幣資本をば、資本そのものと混同するの謬見に終始してゐる。今本篇は、殆どマルクス説の祖述に過ぎぬものであり、何等新たな研究を含まざるものであるが、たゞ私は、先きに發表した論文を取消す意味において、之を茲に公にするものである。

1) 第三卷第一號(大正五年七月)參照

2) 第三卷第二號第三號(大正五年八月、九月)および第五卷第二號(大正六年八月)參照